從つて人類の大功勞者である。此の意味に於いて既に吾々は此の大なる功勞者に對ふ時は、相應な崇敬を拂はなければならぬ。

また、我國の八百萬の神々と云ふも、我々現在の生存を有する上に於けるこれ又大なる功勞者であつたことは云ふまでも無い。從つて其神々へ對して、敬意を表し、禮拜し崇め奉るべきことは、吾々國民として當然の務めでなからねばならぬ。先づ凡ての神々に對して敬意を表し、禮拜もすべきであることは解ると思ふ。

農村青年諸君、諸君は皆目上の人々へ對する時は、相當な敬意を拂ふであらう。必ず拂つてゐるのである。普通の人間であるからには皆何處までも相應な敬意を表さぬ譯には行かぬ。ところが、神々は、皆この目上のものである。人類乃至國家の功勞者であつた目上の方々である。勢ひ尊敬禮拜を行ふ可きことは否むことの出來得ない事實である。

□我國民の信仰中心

信仰は斯くの如く大切なる事柄である。そうして神佛は斯くの如きものであり斯く斯の如く尊敬し禮拜すべきものである。ところで我國民はその信仰の中心を何處へ置いたら良いか、キリストにすべきか、佛敎に依るべきか、八百萬の神々にすべきか、或は其他の神々敎祖等に依るべきか、諸君は大いに倚るべき神佛の數多いのに對して迷はざるを得ないであらう。

然し「諸君よ決して迷ふこと勿れ」と余は云はんとするのである。何故かと云ふに、前にも既に述べ來つた如く、一切の神佛は吾人々類の功勞者である。その一切の功勞者へ對しては、諸君が常に一切の目上の者へ對して敬意を表するが如く、一切の神々である人類の功勞者へ對しては、悉く同時に禮拜し尊崇したなら良いでは無いか、甲の目上の方が眞理を說けばそれを信用し、乙の目上の方か他の眞理を說

けば諸君はまたその方を信用し信頼するが如く、一切の神佛へ對して同時に敬意を表し、尊敬することが、何で惡いことであらう。何うして恥づべき事であらう、少しも恥づ可き事でも無ければ少しも惡るいことでは無いでは無いか。

然し、甲の方は自己に引付け樣として乙其他の人々を中傷する、乙の方は乙の方で又甲其他の人々をそうした目的で中傷するが如く、佛敎の說く處は、佛敎で無ければ人間は行く先きも解らない樣なことを云ふ。キリストに行けば、またキリスト敎でなければ人類は救はれ無い樣なことを語る。其他の宗敎の悉くが、殆んど又甲乙兩人の其他の人々の他を中傷するが如く中傷する。勿論それは、敎祖などの方々が說かれたことでは無いのであるが——兎に角それ等の中傷を信じて、多くの神々を同時に尊敬することの出來得ない人々があつたならば、それは諸君の自由にお任せする外、仕方はないのである。二千年の昔、或は三千年の古代に於いても、キリストは『信仰あるものよ來れ』と云ひ、釋迦は又『緣なき衆生は度し難し』とさへ

云はれてゐる。如何なる神佛に依らるゝとも、それは敢て余の關するところではない。まして、畏ゐことではあるが、前に我が　主上　陛下に在しましては國民一般に對して、信仰の自由を下し給ふたのである。如何なる宗敎に信仰を置かうとも、各自自由を與へると云ふ、實に有難いお思召で吾々國民に下され給ふたのであつた。吾々の信仰は此の有難き聖旨に依つて、自由に門戸を開放されたのであつた。各人如何なる宗敎を信仰仕樣とも、少しも差支へはないのである。

然しそれでは困る、同時に凡ての神佛を信仰することは出來ぬ。其時には何れを先きにす可きか——と云ふ者もあらうと思ふ。が、それには我國最初からの八百萬の神々に依つたならば、それが第一佳いことではあるまいか「遠い親族より近くの他人」と云ふ言葉があるが、其れと同樣、人類全體の救世主である神や佛よりも、近くの我國家の功勞者である八百萬の神々に依るが好いであらう。けれど『八百萬の神々は、吾々に行く可き道など敎へて呉れぬ。說き示して呉れぬから困る』恁う

云ふ理由を唱へる人々があるかも知れぬが、然しそれは少しも心配することのないことを心配するのである。八百萬の神々は其前に於いて、忠を示し、孝を示し、或は武を、或は勇を、また仁義禮智其他を實言實行を以て吾々に敎へて置いて呉れた。示しておき說かれて置いて下さつたのである。何も少しも說かず、敎へず居られたものではない。充分我國民に說敎し、指導を與へて呉れておかれたのである。

終りに云ふ、我農村青年諸君、諸君は自由に信仰し崇敬して、其處に自己を支配する神佛心仰の中心を固め、確固不動の精神生活をすると共に、人とし、農村民として、神に近き者となられんことを切望する次第であることを。

□農村最後の問題

事物には順序があり、階段がある。農村に眞の叫びを揚げんとするには先づ農村內部の充實が必要である。此の意味に於いて、余は農村の根本的研究より初めて青

年諸君の立場を示し、取る可き主義、手段等を述べて遂に根本的急務に說き及ぼしたのであつた。此處に於いて、愈々此の最後の問題を說く可き必要が生じた。最後の問題とは何であるか、曰く『最後の目的』である。然し一言にしてこれを云へば、人類全體に於ける——また日本農民として——自己の職責を果し、他の凡ての業者と共に、公平に、平和圓滿に、並行して行く——にあるのである。

諸君、農村民の立場にして、若し他の人々の立場より幸福の量が多かつたならば他の人士に對してその幸福を分ち贈るの必要があらう。又それと反對に、苦痛の量が大であつたならば、不足なる幸福を與へらるゝ樣求めねばならぬ。詰り、爲政者が、我農村に對して、不公平に酷であつたならば、諸君は大いに聲を揚げて其不公平を訴へる必要がある。また社會的に、我農村人士の立場が無視されてでも居たならば、これ又、大聲に叫んで諸君は自己の存在を他に示さなければならぬ。然し此

の行動、此の戰鬪を爲さんとすれば、種々なる準備が要る。要意がなからねばならぬ。考慮を欠く行動を觀て、他人は暴だと云ひ、無智だと評し、取るに足らぬと云ふ。我農村の此の場合に於ける準備、要意、設備、充實として、余は農村問題の根本的研究、諸君の立場より、取るべき手段、進む可き方法に就いて述べ來たつたのであつた。準備や要意、設備と云ひ充實と云ふは、一面又諸君自からをしてその行爲に出でさしむるの原動力である。此の意味に於いて、既に諸君に對して、余は諸君が戰鬪力の完成を謀つた。諸君が如何に行動すべきか、如何に叫ぶべきかは此の場合となつては、諸君の力に俟つこと甚だ多いのである。諸君は智と識とに依つて完全なる理性を養ひ、その理智の眼を以て自己の立場を斷じ、取るべきを取り、捨つ可きを捨てゝ盡す可きを盡したならば、其處に諸君は眞の叫びを揚く可きの材料は得らるゝのである。靜確なる數字、相違なき尺度を得て相手に對ふの時、諸君は其處に眞の目的を達し得らるゝのである。

吁、我農村青年諸君、諸君は自から起つて第一に自からの力に依つて此の目的を達すべく努力せねばならぬ。それを忘れてはならぬのである。小兒を起たせて歩ませんとするも、自から歩み得ざるものは、まだ安全なる歩みを取ることは出來ぬ。朝鮮の如きを獨立國となさんとするも、所詮は保護ある獨立國と成るに過ぎぬ。我農村の安全を得るの日は、我農村民の眞に眼覺め、自から起つて行動し得るの時でこそあるのである。

尙此の最後の問題に就いても云ふ可きことも甚だ多い。又云はんとする事項も尠くないのである。然し要するに、余の云ふ十よりも、讀者諸君の悟る一の尊きものなるを識る。且つ駄尾の長きを恐れて此處に此の筆を擱く。

現代 農村青年の行路 終

附錄

農村と娯樂

□娯樂の意義と性質

斯うした題目でこれを說くと、何となく、頗る六ケ敷いものゝ樣に想はれるであらう。然し其六ケ敷い說き方や、詳細な解釋は止めておく、一々委しく述べてゐたならばこの附錄が反つて本書の大部分を爲してもまだ足らない事にもなるからである。

一體娯樂とは何であるか。誰れにも解り切つてゐる樣で、其實中々解決されてゐないのである。然しこれを俗に、また解り易く云ふたならば、『タノシミ』所謂恁う

云ふものであらう。また趣味――など云ふことも出來得ることゝ思ふ。

次ぎに又た、其の性質と云ふとこれも、申し樣に依つては隨分と云ひ方もある、其說朋も長くなる。が然しこれもまた禁物であるからたゞ一寸見た所で止めて置くことに致さう。『樂しみかなければ働けぬ』とは一般の人々の云ふ所である。而してまたそれが事實なのである。然らば何うして人間は其樂しみが無かつたならば働けないか、それを說く必要は認めぬ。

何せよ人間は、樂しみと云ふ目的がなければ働け無いと云ふことだけは事實であるとすれば、所謂その樂しみなるものは人間を働かせる――活動させる――その原動力と云はれるであらう、すると、働かふ――活動仕樣――とする人々は是非共此の娛樂を求める、或は娛樂を持つ――と云ふことが無ければならぬ。これが所謂一面の娛樂の性質である。

ところで、多くの人々が例へ極めて若い青年の方々であつても、必ずや一度や二

度は耳にされたことではあらうと思はれるが、此の樂しみと云ふことに就ゐて恁う云ふ話しがある。

某處に大層な金持ちがあつた。そして其家には奧さんがあつて、其奧さんは毎日々々美しいお召物に着飾つて、三度の食事なども實に〳〵善盡し美味盡したものを味つて、金錢で出來ることならば何一とつ不自由なく、所謂世の仕度放題を仕盡してゐた。するとまた其金滿家の前の街道に、毎日々々出かけて來て道行人々に袖乞ひしてゐるこれは又實に哀れむべき貧乏人も普を通り越してゐる乞食があつた。

で當然のことではあるが其乞食は毎日々々〳〵其金持の家の、奧さんの身の上を想象して、非常にそれを羨んでゐた。ところで、其奧さんの方では、これはまた普通のことゝは一寸想はれ無い樣であるが、其乞食を見て毎日々々〳〵乞食の身の上の幸福を羨望してゐたと云ふ。

そこで一とつ考へねばならぬことがある。其の善盡し美盡してゐる金持の奧さん

が何うして其の乞食の身の上を幸福だとして、それを羨望しにゐたかと云ふことである。取り方に依つては樣々な意味に取ることが出來るのは云ふまでも無いが、此處には樂しみ――娛樂――と云ふことの性質なるものを說明する上に於ての引例であるから、次ぎの樣に其意味を取つて見樣。

先きの乞食其者が、富豪の奧樣の身の上を羨ましく思ふと云ふことは普通のことであるが、其金持の奧樣が乞食を羨んだと云ふことは、これは確かに奧樣の誤つてゐたこととしなければならぬ、誰しも恁う解釋するであらう。何故となれば、成程其の奧樣としても、必ずしも凡てに他人の眼に映ずる程樂しいものでは無かつたかも知れぬ。然し乍ら、また必ずしも不幸なものであつたとは誰しも云はぬであらう。其奧樣としては、それだけに黃金の寶に包まれてゐるのであるから、其黃金で得られべき樂しみを得樣とするならば、何處までもそれは達することも出來得たと見て良いからである。それであるのに其奧樣其人は、其黃金で得られべき幸福を樂しま

うとせずして、他の或ものを得樣とした爲めに、そうした乞食の身の上などを羨望して止まない樣なことになつたのであつたからである。

此處に於いて一とつの注意すべき事件がある。樂しみ――娛樂――と云ふことは誤まつて求ゆ樣としたならば決して求め得られるものでないと云ふことである。また其反面として次ぎの樣にも云ひ得るものであらう。

娛樂――樂しみと云ふことは、求め方に依つては必ず相應に何人にも求め得られるものである。

と云ふことである。

之に依つてこれを見れば、樂しみ――娛樂と云ふ其事は、人間を活動させる原動力であり、故に又た是非共人間に必要なものであつて、求めれば必ず求め得らるゝものであると云ふことが解ると共に、また誤つて求めたならば、娛樂が、誤樂――となるものであるから頗る注意すべき事柄である、と。

□農民の求むべき娯樂

既に述べ來つた如く娯樂は求むべきものであるが、誤つてこれを求むる時は、遂に娯樂は誤樂となるのであつて、それがまた種々なる意味に於ける誤つた樂しみと云ふことになるとしたならば、農民は農民とし求むべき娯樂を求めねばならぬこともまた云ふまでもあるまい。言葉を替へてこれを云へば、各自職業的娯樂を求めると云ふことにせねばならぬと云ふことになるのである。

例へば、都會の市街地に住む人々が『私は乘馬が樂しみですから馬に乘ります』などと云つて、朝の食前運動にも市街地を乘り廻す、イヤ仕事を終つてから――または一寸暇があるから――と云つて乘り廻すなどゝ云ふことを行つたならそれこそ大變、近所隣りの人々許りでは無い市街地全體の人が非常な迷惑を蒙ると云ふことになる。然しこれなどはまだ或程度までの別なものとしても、農村の人々などが、

『イヤ私は現代流行の活動寫眞を觀る事が尤も樂しみですから私はそれを見ます、などと云つて、業々遠い町場まで度々通ふとか、乃至は買込んで來て農村で度々行る、或はまた『自動車に乘り廻すと云ふ現代的の娯樂が私は尤も好ましいです』など云つて、度々自動車で乘り廻す樣なことでも行つてゐたならば、中農位いの人々であつたならば忽ち全資產を投げ出しても、まだ〳〵自動車乘廻しの借金が山程殘ると云ふものになるとも云はれるであらう。そうなつたならば、それこそ飛んでもない事になる、飯も食はれぬと云ふ我が農村の人々は。粥すら喰ふ事も出來無く成つて了ふのである。狂人でも無ゐ限り、眞逆にかゝる眞似をする人間もあるまいと思ふものゝ、現代の我農村に於ける人々の求めつゝある娯樂の大勢を見ると、殆んどこれに近い娯樂を求め、またそれを現に行つてゐると云ふ實例を見ることが出來得ると云ふのは、實に嘆かはしい次第と云はねばならぬ。

勿論それには爲政者の行り方などにも誤つた點なども無い譯では無い、僅々三十

年や四十年間の短かい間に於ゐて、國民普通教育を行つたからと云つて、まだ〳〵國民教育の効績を充分に擧げ得られたと云はれぬ樣な我農村の人々などに向つて、『盆踊りは甚だ風儀上宜しく無いから止めなければならぬ、絶對に禁物である。』などと云つて、昔し印度に於いて、人道に立脚した孝道に依つて始められ、傳へ傳へて現代に及んだ盆踊りそのものを、全然無視する許りか害があるなどと云つて直ちに禁止して了つたなどゝ云ふ樣なことなどもあり、又は社寺合併など云つて凡ての農村等に於ける神社佛閣を合祠することにして了ふなどゝ云ふ樣な我が大和民族に於いて尤も大切な祖先崇拜、敬神の念を去らしめる樣なことなどして一面國民經濟上から過多である農村の休養日を少なくすると云ふ効果があるとはいへ、又前者の盆踊禁止などにも一面國民に向つて時代的覺醒を促す資となると云ふ善美な點などもあるものゝ、斯くして在來の農村に於ける種々なる娯樂に强烈なる制裁を加へるなどゝ云ふことをしつゝある爲めに、勢ひ我農村の人々としても、止む無く現代

的な娯樂を求めると云ふことになつて、誤つた娯樂其ものを求め、又た行ふことになつてゐると云ふ有樣ではあるが、是非共此の職業に相應しい娯樂を求めると云ふことなども、大いに注意すべき事柄であると思ふ。

扨然らばその職業的娯樂、農民としての農村の人々の求むべき適當なる娯樂とは如何なるものであらう乎、以下少しく順を追ふて說き進めて見やう。

□第一に此の娯樂あるを知れ

前記の如く、又た本文中に於いても度々述べ來つた通り、現代の我農村に於いては、既に〳〵飯も喰はれぬと云ふ危機に瀕して居り、且つは在來よりの農村に於ける種々なる娯樂に對する爲政者の制裁などもあれば、其他種々なる關係からして、勢ひ農村に於ける生活に、多くの不滿を持ち、不快や不充實に堪え難くして、日に日に農村青年の都會集中などと云ふ現象を來して居るのであるが、それ等農村青年

の都會に上る人々に向つて『君は何故に農村生活を厭ふ哉』と云ふ問ひを以てすれば。第一に開口一番、農村生活は面白くない――の辭を以て答へるのである。成程、經濟的に危險であり、隱れたる活動家であり、比較的、押へられたる生活者である我現代の農民生活は、血湧き肉踊る青年壯年の人々に取つては、眞に不滿不快不充實に堪え難いことであらう。決して無理ならぬ事柄であると思ふ。然し乍ら、幸か不幸か、それ等の都會に出で來つた青壯年者にして、一朝都會生活に安定を得られた場合には殆んど何事も無い樣でもあるが、若し然らずして、都會に於ける生活の道すら求め得られず、と云つて今更ら故郷に立戻るのも男らしく無いなどと、さ迷つてゐる多くの人々に就いて正して見ると、先きには連りに農民生活の苦痛や不滿を語りつゝあつた人々も、此の時となると、連りに又過去の農村生活に於ける快樂を云ひ、何故私は斯の如く樂しい田園を捨てゝ、恁うした不快な都會に上つたのであつたらうか、と、後悔の意を洩らす人々が多いのである。

これは云ふ迄も無く、先きに述べた誤つた樂しみを求めたのである。若し又然らずとするも、遂に結果はそれと同一であると云はざるを得ないであらう。

嘗て予は恁う云ふ話しを耳にしたことがある。若い夫婦があつて、初めの中は眞に仲好く暮してゐたが、其男の方が餘程多情者であつたと見えて、ある時一人の娘を見初めて其後は熱烈に其娘を戀してゐた。而して遂に人々の意見をも馬耳東風と聞き流して、妻を離緣し、其娘を後妻として迎へた。所が結婚式を擧げた翌日になつて氣がついて見ると、新しい其妻君は、足が一方大さう短かくつて、所謂ちんばであつたと云ふ。其處で初めて男は先の妻君には身體が完全であると云ふ美點を認めて、再び新しい妻君を歸して前きの妻君を呼戻したと云ふことであつた。

此の事實と同じく、凡ての樂しみ、或は美點など云ふことは、他に向つて求めて許りゐたならば、現在の職業などからは更に其善美なる所や、快樂なる點は見出されないのであるが、我農村青年諸君の中などにも、多くの此の男の樣な人々がある

のは眞に悲しまねばならぬ事であると思ふ。

實際農村に於ける生活、天然を友とし、自然理に從つて、質朴なる人々の間に居住する農民にも多くの美點がある、快樂が含まれてゐるのである。

第一に一家全員打揃つて野に山に、或は田に又た畑に、共に働き共に休養し得る事などは、實に農民特有の快樂だとも云へるであらう。鷄鳴の美音に眼を覺して跳ね起きると、清水に洗面を濟して新鮮な空氣を思ふ樣呼吸し、母は朝食の仕度に取かゝれば父は鍬を手にして裏の畑に芋を掘り、茄子を手取る。祖父母は弟妹を伴ふて庭に出で陽の昇るを拜して遊べば、少年青女は家の内外の掃除をする。朝食の膳に一家打揃つて向ふ頃には池水の魚は勇ましく踊つて菜食の好味に一段の味ひを添える。間も無く壯者は朝露を踏んで一日の勞働に向へば、途には同じ人々のゆかしい溫情に滿ちた言葉が交はされる。斯くして田に畑に、野に又た山に數時間の勞働を過ごせば、母や妹の運び來るお茶受けに先づ一息して此處に休息する。時にはぎ

の煙草を一ぷくすれば味ひは福壽草の千福にも優る共劣らず、手製の茶も宇治の極上以上の味ひして、一個の燒餅はこれ又飛切りの上菓子を凌ぐの風味と味ひとを含むものありである。

中食の團欒、午後食の快味は云ふに及ばず、若しそれ森より或は山より出でし陽の西山または鎭守の森に沈むの頃、林の樹々に道邊の叢に、妙なる虫聲を聞き、或はそよ吹く風の自然の音樂を讃ふ、乍ら、ねぐらに歸る鳥と共に、再び打連れて家路に歸る其時にや激しかりし終日の勞も一時に癒ゆるの感があるでは無いか、これ等の快樂、これ等の妙味、これ等の情趣は正にこれ我農民の獨占たる天與の恩惠であつて、所詮不潔なる空氣塵埃に包まれ、終日終夜身に暫時の油斷も得られず、心に寸毫の餘裕もあらぬ都人士の到底夢想だに及ぶ所ではないのである。

予の如きも今は帝都の近く俗地の稍喧噪なる土地に在るも、數年前までは秩父山下の故郷に在りて、前記の妙味を經驗せるの外、尙勞後の夜々を春秋に亘つて或は

山月滴るが如き光下に竹笛を鳴らして其風音を探り、又は休日友と清流に釣を垂れて鮮魚に親みなどしたる其當時の樂しさ快ろ好さは、此の筆を進むるに當りてなど特に浮び來つて直ちに筆を投げて故郷の山下に飛んでも行き度き心地もさするものであるのである。

吁、總數五百餘萬戸の我が農村の諸君よ、吾人農民には斯かる常々の快樂、妙味、情趣を含める娯樂の在することを忘れ給ふこと勿れ。これ先づ第一に農村に農民に特有なる娯樂なのである。

重ねて云ふ、樂しまんと欲すれば苦中又自から數多の樂し味の存するものなることを。

□種々なる農村の娯樂

前に述べたことは、農村に於ける日常生活に伴ふものであるが此處には種々なる農村に於ける娯樂に關して少しく說いて見やう。

五節句、これは我農村としては殆んど至る所今以て行はれて居ることゝ思ふが、人日、上巳、端午、七夕、重陽の各節句祭りのことである。其時々に其處此處の神社などに祭りがあり、或は旗錦を建て、又は七夕を飾つて樂しむと云ふのであるが、此の時折に於ける農民諸君の快樂は又た甚だ少なからぬものである。

で斯樣な節々には各地それ〳〵異つては居るものゝ、或は赤飯を炊き、又は麵類を作り、餅を祝ひなどして樂しむのであるが、斯樣な時に際しては各思ひ〳〵の催しなどして大いに樂しむべしである。

大祭祝日、陸海軍紀念日、此の當日には是非共各自業を休み、國旗を掲げて國民として國祭日を祝福し、各自は又此日を以て大なる樂しき日とせねばならぬのである。何うかすると、碌々國旗すら掲げぬものなども間々見受けるのであるが、これは甚だ宜しくないと思ふ。各地其其の土地々々に適した娯樂の催しでも行つて、充

分に祭祝の意を表し、又自からも樂しむ可きである。

青年會や姉女會、此の催しは多く祭日紀念日などに催うされてゐる樣であるが、眞に結構なことである、そしてそこには、面白く樂しく過ごすと共に、日進月歩の時代に遲れて行かぬ樣、或は小學校の先生方、又は在鄕軍人の人々などより興味と有益とを兼ねた講話でも行つて戴いて、共に樂しみ乍ら、又一面に於いて相互に親交を謀り、種々なる見聞上の利を收めると云ふ方法を講じられ度ひと思ふ。

讀書の娛樂、これは既に本文中に於いて常識修養として必要であることを說いておいたのであつたが、成るべく農村に關する種々なる興味ある書籍でも、青年會などで求めて、小圖書館的な設けでもやつて置くとか、乃至は各自休養日に持合せて讀み、一面智識の增進や常識の修養に資すると共に、又一面に於ては大いに之れに依つて樂しみ、而して品性を高めると云ふことは眞に好ましい事柄である。今後益々世の進みに從つて、例へ如何なる土地であらうとも是非共これは實行せねばならぬことの一とつでもあるのである。

鄕土研究、多くの人々が、歷史を調べたならば、其處には必ず相應な興味を覺えるものであるが、各自に於ては自家の歷史を調べ、村落としては共同して餘暇ある毎に鄕土の研究を爲し、記錄でも作ると云ふことは、一面頗る有益なことであると共に、又中々の娛樂とすることも出來るのである。

そして鄕土に歷史上古蹟でもあつたなら其天然物なり、或は建物なりと保存すると云ふことも之れ又利を有し樂を生ずるものである。又た口碑を探り、俚謠を調査することなども共に又然りと云ふべきである。

副業的娛樂、これは又經濟上の不如意に在る我農業にあつては、頗る生產的であつて、一面大いに農村經濟の上に益すると共に、家禽家畜でもあつたならば、生物であると云ふ點に於て、又それが不知不識の間に於て生長して、自他共に益することになるのであるゆへ、頗る實利實益であると共に、又た相應な娛樂とすることも

出來得るのである。

尙此の外、數へ來れば殆んど枚擧に遑あらずと云ふ程であるが、紙數の都合もあれば此の位いで止めて置くことに致さう、たゞ要するに、地方地方、土地〳〵に依つて、古來からの習慣もあり、風習もあるのであるゆへ、讀者諸君は各自宜しく參酌して、相應しき地方的であり、且つ歷史的であり、又成るべく益福共に得らるゝの娛樂を採ることに勉むべきであると思ふ。

□娛樂に對する二三の注意

尙最後に臨んで二三の注意を加へて置くならば、凡ての娛樂に於て、農村としては農村相當なことを爲せと云ふことは尤も注意を要する事と思ふ。それは、第一に農村經濟上の事柄なども考へて作さねばならぬことである。例へば此處に祭日等に當つて假裝會なら假裝會の催しに就いて、種々なる必要物品などあるとする。其時

には成るべく、其必要な凡てのものを、例へば葉とか木の葉とか云ふ樣なものにより求めて、出來得る限り賦費を用せぬ樣にすることなどである。

又青年會に於ける討論會などの場合に於ては、論題其のものを、極めて農村民として適切な事項を撰んで爲すべきである。予は各地漫遊中、偶々青年討論會などに列席して見ると、宛然國會でも開かれた時の樣に、『我國今後の對外策は如何』とか『中學校以上に於ける男女混合敎育の可否如何』など云ふ題目を提出して熾んに論じてゐるのを見聞して、或時などは頗る滑稽の感に堪えぬことなどもあつたのであつたが、成るべく農村民とし適切なる論題を以て討論すると云ふことは、有益であり、樂しみであることを忘れてはならぬことゝ思ふ。

次ぎに又た、農村に於ける娛樂は、特に農民中に於ける見聞者の悉くに興味を感じさせると云ふことが必要である。老幼を問はず、男女を分たず、見る者、聞く人々の全體が、嬉々として興じ、暢々として樂めると云ふ方法を取らるゝのは、凡て

が固定的である我農村に在つては必ず俱になければならぬ事であるからである。

尙此の注意すべき事柄に於いても書くべき事も甚だ多いのであるが、要するに讀者諸君にして時代に眼覺め、大正の御代に於ける帝國の臣民とし、世界の日本農村の青年として、野鄙に流れず、淫靡に墮せず、如何なる人人に見聞さるゝも更に恥ずる所なきを期するの程度に於て樂しまば、これ尤も善美にして同時に我農村の誇りたるものとなるのであることを記して筆を擱く。

最後に附記す。この農村の娯樂と題して予がこれを本書の附錄と爲せし所以は、又これを以て我農村青年に、幾分たり共快樂の道を示し、樂しく農村生活を爲すべきを謀と共に、本書の目的とする農村青年の行路に向て、又例へ小なりと雖も其充實に資し、行路を輝すの一燈火と爲さんとする予の微志に出でたるものなることを。

現代農村青年の行路附錄（終）

大正五年九月廿八日印刷
大正五年十月五日發行

【現代農村青年の行路】
【奥附】

著作權所有

【定價金四拾五錢】

著者　字根義人
發行者　山崎曉三郎　東京市淺草區田町二十八番地
印刷者　岡部鎭　東京市淺草區三筋田町五番地
印刷所　國華堂印刷所　東京市淺草區森田町五番地

發行所　東京市淺草區瓦町廿八番地　國華堂書店　振替貯金東京一〇七三五

東京國華堂發行

28

360
498

終